日向纂記に

「大友義統（宗麟の子）、凰山（ボンサン）ニ屯シケルガ、平壌ヘノ援軍モオクラズ、狼狽シ王城（漢城）サシテ逃ゲタリケル。秀吉之ヲ聞テ大ニ怒リ日本一ノ臆病者ナリトテ、大友家代々ノ領地豊後国ヲ没収セラル」

とある。

五月十五日、明国の講和使節が名護屋に到着した。

豊臣秀吉は講和七条件を提示した。

その内容は、「明の王女を日本の后妃（こうひ）とすること。朝鮮四道を日本に割譲すること」などであった。

この講和交渉の成り行きを見守っていた朝鮮在陣諸将のもとに、豊臣秀吉から「再度晋州城（チンジュ）ヲ攻略セヨ」との命令が届いたのである。

朝鮮在陣の諸将と日本からの増援部隊の合わせて十二万四千で、六月二十一日に晋州城を包囲し、二十九日には陥落させた。

日向記には、

「祐兵主モ、ヒラントヨリ晋州城ニ出陣シ、島津又七郎ト相戦ヒ、数百人討捕ナリ」とある。

日向纂記にも、

「当家ヨリハ寓公（伊東義賢）一手ノ兵ヲ励シ、真先ニ攻登リ名誉ノ手柄ヲ顕（あらわ）シケル」

とある。

晋州城を陥落させた日本の軍勢は、慶尚南道へ退却し、講和交渉に期待をつないだ。

七月、熊川（ウンチョン）城に在陣の折、伊東祐兵を廃して、嫡流の伊東義賢（よしかた）を奉立しようとの謀反が発覚した。

この謀反の要因は、伊東祐兵の石高が二万八千石があったことにあった。五万石以上の大名でなければ指揮権は与えられず、たとえ手柄を挙げても旗頭毛利吉成のものとなり、恩賞は期待できないのである。伊東家嫡流の伊東義賢は奉行衆の覚えもめでたいので、主君を代えようとの策動が起こったのである。

（倭城跡）

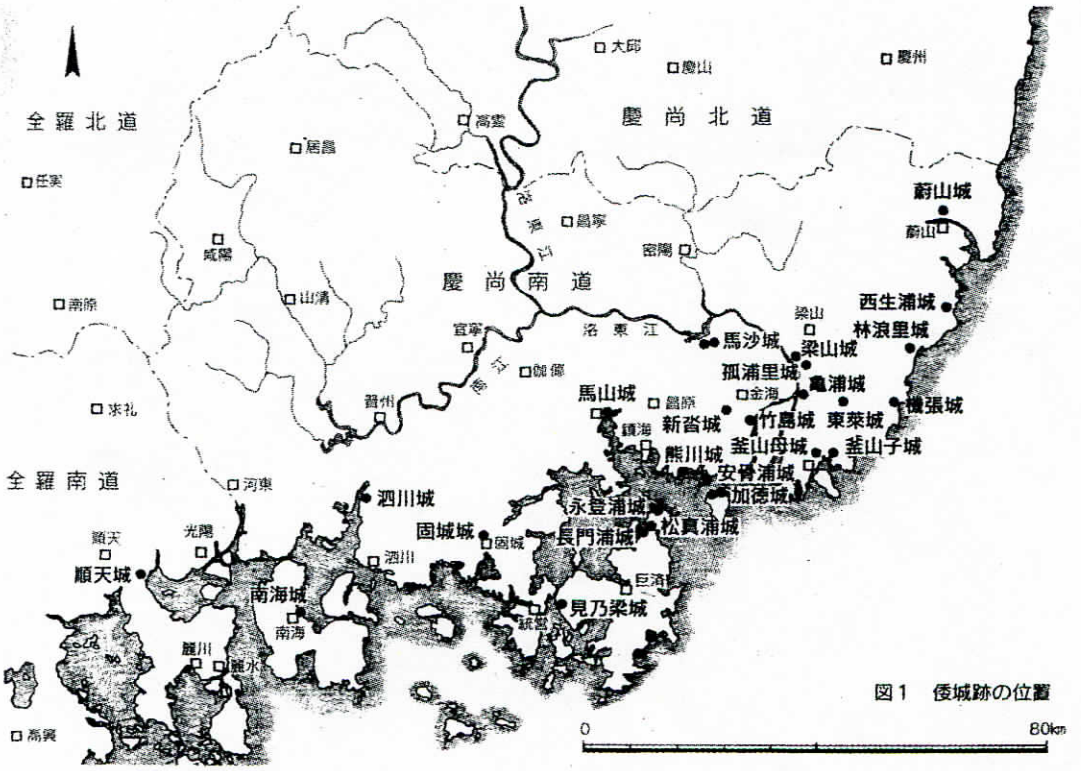

図1　倭城跡の位置

日向記には、

「日本と明トノ書簡数ヶ度ニ及シ時、伊東義賢主能書タル故、三奉行衆モ兼テ聞召及ハレ、書簡ノ読解難キ砌ハ彼義賢ヲ召出サレテ、諸事懇ナリケルトカヤ。文禄二年六月十四日川崎権助病死ス。

義賢（病にて）釜山浦ヲ船出シ、対馬ヨリ壱岐ニ渡ル船中ニテ、七月二十一日、二十七歳ニシテ逝去ナリ。

舎弟祐勝モ病気ヲハッシケレバ、釜山浦ヲ船出シ難風ニ離サレ、石見国ニテ七月十四日、二十四歳ニシテ逝去ナリ」

とある。

この事件について、日向纂記には、

「川崎氏忠功覚書ニハ、此公世ニ在シテハ国中終ニ静謐ナラストノ説ヨリ、鴆殺（毒殺）ノ事ニ及ヒ、（川崎）権助相伴ニテ寓公兄弟（義賢、祐勝）ニ鴆薬をススメシト云」

とある。

文禄二年八月十三日、豊臣秀吉は九州以外（中国、四国など）の朝鮮在陣諸将に一時帰国を命じた。朝鮮半島南端の倭城の守備には約四万があたり、和議の行方を見守ることとなったのである。

この時の模様を、武功夜話では「諸将を集め、くじ取りにて（帰国）順番相決め、乗船せしめ…。この度の帰国、欣喜せざる者なし」

とある。

その後、伊東祐兵のもとにも帰国を許す書状が届いている。

日向記に、

「文禄二年十二月秀吉公朝鮮在陣ノ軍勢大勢ハ三分一、小勢ハ半分在陣セシメテ交々国許へ是ヲ遣シ用事相達スヘキ旨朱印到来ス」

とある。

この時、伊東祐兵と家臣の半数が飫肥に帰国したことが伺われる。

飫肥検地のこと

日向纂記に

「文禄三年（四月）、清館（靖化）に在陣の頃、飫肥より家臣到着し検地のことを報告す。報恩公（祐兵）朝鮮渡海ノ初ヨリ小身ニテ大功成カタキコトヲ口惜ク思ハレケルニ、（前年）増高ヲ願ヒテ領分中ノ検知アリ、舊高二万八〇〇〇石ナルカ、此度ノ検地ニテ三万六〇〇〇石ト成ケレバ、士卒大勢召シ寄セラレ騎馬モ五十騎立ラリケリ」

とある。

伊東祐兵の石高かさ上げは悲願でもあったのか、止まる所を知らない。

日向纂記にも、

「文禄四年、伊東祐兵ハ石高増ヲ思立テアリテ、飫肥清武ノ田地ヲ検地セシメラル。目的（五万石）通リノ高ニナラズ四万五〇〇石ノ高ニ及ケレバ願立ニ及スシテ止ヌ」

とある。

五万石以下の小大名では旗頭に就けないので、文禄の役出陣中に再度の検地を行ったものの、検地を願い出たが、禄高が五万石には達しなかった。

そして、無理な検地を重ねて慶長十年に五万七〇八〇石となったのである。

虎狩の事

虎狩は、文禄三年十二月に豊臣秀吉が朝鮮在陣の諸将に指示したことに始まる。

「太閤御養生ノタメ、御用ニマイルベキノ虎ヲ御取リ候テ、コトゴトク御上アルベキノ由、御意ニ候。皮ハコノ方イラズ候間、ソノ仁ヘツカワサルベキ旨仰セイダサレ候。頭・肉・腹、イズレモ一疋ノ分、残ラズ塩ヲ御沙汰（塩漬け）テ、マイラセラルベク候」

太閤が精力をつけたいと仰せられているので虎を獲って進上されたいとの内容である。

この指示の後、在陣の諸将は虎狩りに精を出したのである。

日向記に

「セイクワン（清館・靖化）城に御座陣ノ刻、文禄四年正月十四日、虎ヲ射留タリ、秀吉公へ上玉フ」

とある。

また、「朝鮮雉子ヲ献上シ玉フ」、「鯡五桶・鱈百ヲ献上シ玉フ」との記載もある。

三　慶長の役（丁酉倭乱）（慶長1、2年／1596、97年）

慶長元年（一五九六年）九月一日、講和交渉は決裂し、豊臣秀吉は再び朝鮮侵略を命令した。

狙いは、慶尚道・全羅道・忠清道・江原道を占領することであった。

慶長の役の名護屋には豊臣秀吉は一度も出陣することはなかった。また全国の諸大名も名護屋に再び集結することはなかった。

朝鮮への渡海はそれぞれの領国から直接出兵している。

翌慶長二年二月二十一日、侵略の部署と倭城の在番役が発表され、軍勢は十四万一四九〇からなる大軍であった。

一番隊・加藤清正ら一万

二番隊・小西行長ら一万四七〇〇

三番隊・黒田長政ら一万

その内訳は、黒田長政五〇〇〇、毛利吉成二〇〇〇、島津又七郎（豊久）八〇〇、高橋元種六〇〇、秋月種長三〇〇、伊東祐兵五〇〇、相良宮内八〇〇の軍勢であった。

四番隊・鍋島直茂ら一万二〇〇〇

五番隊・島津義弘ら一万

六番隊・長曽我部元親ら一万三二〇〇

七番隊・蜂須賀家政ら一万一〇〇〇

八番隊・宇喜多秀家ら四万

九番隊・小早川秀秋ら二万三九〇

伊東勢は慶長の役が始まると、飫肥から将兵を補充している。

日向纂記・報恩公朝鮮ニ赴ク事に、

「稲津九郎兵衛ハ慶長二年兵隊交代ノ時、十九ニテ初メテ朝鮮ニ赴ク」

とあるものの、文禄二年の兵交代、派遣した軍勢については具体的な記載は日向記にはない。

また、慶長の役では仇敵である島津氏との厚誼を深めたことが日向記に記載されている。

「祐兵主安哈骨（安骨浦）ニ在陣ノ折、（黒田如水の助言を受け）島津義弘ノ加徳（島）城ヲ訪ネ、縁辺（婚姻）ト、御入魂ヲ申シ入レ、神文ヲ取リ交ワス」

とある。

その理由として、伊東家は僅か三万六千石の小身であり、このまま身を立てることは困難であるとともに、朝鮮撤退後の領国支配を確固とするためには、隣藩との友好が必要だと考えてのことであった。

加えて、戦国時代からの伊東・島津の確執を解消するために、自ら島津義弘を訪ねたことが考えられる。

文禄の役での伊東の戦果についてみてみると、

日向記に

「慶長二年、民部大輔（伊東祐兵）ハ大小関（船）三艘ニテ動玉フ、十五日未時（午後二時頃）迄ニ一戦ニ及フ也、一番加藤左馬助（嘉明）、二番伊東民部大輔二艘伐捕得勝利、其時祐兵守護座船ニモ半弓矢数七百三十射立タリ、去共手負四五ニ過ス、長倉加賀右衛門打死ナリ」